

古代東国の古墳文化

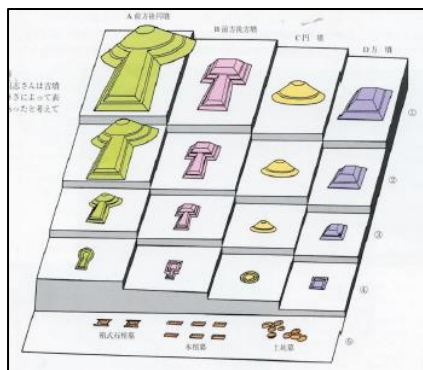
明治大学文学部 史学地理学科 考古学専攻
教授 若狭 徹

はじめに

古墳の話ということでお招き頂きました、私は長く高崎で勤務しましたので群馬の古墳の話を中心にさせてもらいますが、日本の中で東日本がどういう位置づけにあったかということも触れていきます。古墳時代の人たちは古墳だけを造っていたわけではなく、何故あのような大きな建造物を造らなければならなかったことについても紹介していきたいと思います。

1. 古墳時代とはどういう時代か

前方後円墳が造られた時代を古墳時代と呼びます。古墳そのものは7世紀まで造られます、円墳とか方墳とか八角形墳などが7世紀も造られていますが、前方後円墳は早く終わっています（3世紀中頃から6世紀末の350年間）。日本で最初の巨大前方後円墳は「奈良県箸墓古墳」（右図）です、この形の古墳が造られた350年を古墳時代と言っています。日本中で大きな古墳造りに熱中した時代で、列島あまねく・岩手県から鹿児島県南端まで造られました。



前方後円墳をシンボルにした豪族達の連合体があったらと考えられています。

古墳時代にはいろいろな形があり（左図〔都出比呂志氏原図〕）、前方後円墳の中にも大中小があり、更に前方後方墳（四角に四角がくっついた形）、円墳、方墳があります。この中で前方後円墳が一番ランクが高いと考えられていて、ヤマト王権（奈良・大阪を中心とした当時の政治の中心）と連合を認められた豪族に許された形と考えられています。つまり勝手に造ることは許されず、王になるとヤマト王権に出向いて大王と連合関係を確認することで、「前方後円墳を造ってよい」という許可をもらえるという承認制であったと考えられています。

前方後円墳を造っている豪族はヤマトと手を結んでいてその地域を代表する豪族、その中でも経済力によって大きさの序列ができています。その地域の中でもヤマト王権と連合しない第二・第三ランクの豪族は他の古墳の形を造るといシステムが出来上がっていました。

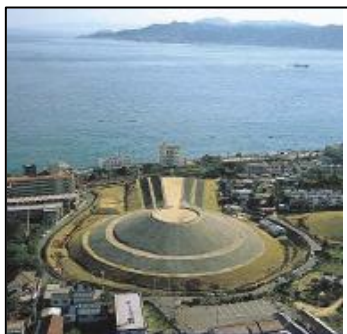
前方後円墳を造っている範囲は同じ考え方（同じ祀りごと・宗教・思想・経済ネットワークを共有している）の人が連なっている範囲です。これが古墳時代の大きなシステムになります。

前方後円墳を造っている範囲は同じ考え方（同じ祀りごと・宗教・思想・経済ネットワークを共有している）の人が連なっている範囲です。これが古墳時代の大きなシステムになります。

2. 共同体のシンボルとしての前方後円墳

◆単なる墓ではなく、ランドマークなのです

一言でいうと偉い人のお墓なのですが単なる墓ではなく、共同体のシンボルと考えられています。見た目が派手でその土地のランドマークでした。古墳が造られた当時には木は生えていません、土を盛り上げてその表面に石が貼ってあり、遠くから見ると白く見えました。発掘調査研究の結果を基に復元整備された古墳が「兵庫県五色塚古墳」（左図）です。ここは瀬戸内海の淡路海峡にあり、古墳時代の人、朝鮮半島・中国から来た人が船で通る海峡を押さえるような所に古墳が造られています。船から見ると古墳は白く輝いて見えます。海運を押さえた海運王のお墓として目立つところに造られています。「長野県森將軍塚古墳」は長



野盆地から関東に行く「とば口」にあって、当時の民達の村を見下ろすような場所にあると同時に交通の要所を押さえるような目立つ場所に造られるという位置づけです。交通経済拠点、あるいはこれから開発を進めるような場所に古墳があります。まずそのような場所に古墳を造って、そこに人、経済、技術を集めて開発していく。(東京副都心に都庁を立て開発を進めたのと同じ位置づけ)つまり地域のシンボルとして造られている。

(右図)は墳丘長 100m 以上の大きな前方後円墳をプロットしたものです。これをみるとヤマト地域に多いのは当然ですが、瀬戸内海に面した岡山県にも、北部九州にもあります。これはヤマト王権の大阪の港から船で朝鮮半島に向かって航海する海運ルートを押さえる所に主要な古墳があることが分かります。

京都の丹後半島にも古墳がありますが、この地域は大規模な水田がない場所ですから、農業力があって古墳ができたわけではなく、ここに港があり、ヤマト王権から北上して丹後の港から船で朝鮮半島に向かう、その港を押さえている豪族がいたことが分かります。日向(宮崎県)は、南側(沖縄方面)文化との関係でここに沖縄方面の文物が集まってヤマトに運ばれます。関東に目を向けると群馬県に沢山あり「東のヤマト」のような場所です。千葉県にも沢山あり特に東京湾沿岸部に特に多くて、港を押さえている豪族達がいたことを示しています。ヤマトから山越えて伊勢から船に乗って太平洋側を回って最終的に内房に着き、東北方面にまた利根川、荒川を上って関東内陸の方にアクセスするなど水上交通を押さえた豪族が沢山いたということになります。北端は岩手県、南端は鹿児島県の志布志湾岸です。

古墳の分布をみると当時の政治的な力の在り方、交通ネットワークなどを復元することができます。特に古墳が多いところはヤマトを中心とした同盟国のエリアになります。ヤマト王権を中心として群馬、岡山、宮崎、出雲などの豪族たちが連合していたということが当時の社会システムになります。



3. 群馬県地域(上毛野)の遺跡から豪族の地域経営を考える

◆古墳時代の豪族は古墳だけを造っていたわけではない

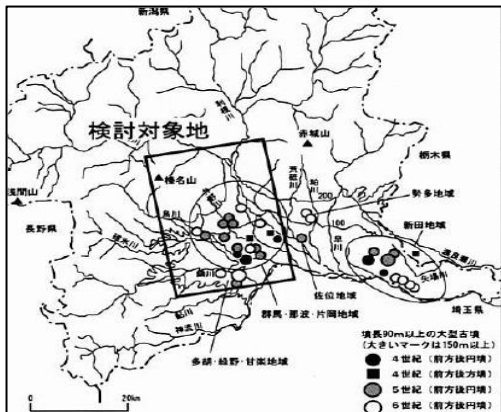
豪族たちは様々な経済活動・政治活動を行っていました。その事は遺跡が断片的にしか残っていないくて意外とわかりませんでした。古墳は大きな山ですから壊されずに残るのですがそのほかの遺跡は埋もれてしまっていて残りませんでした。ところが私が担当していた群馬県地域は火山灰によって古墳時代の遺跡が広く埋もれているのです。それを研究することで当時の豪族たちの活動の在り方がわかってきました、また何故こんな大きな古墳を造ることができたのかに迫ることができました。

古墳時代は陸路も発達していましたが、水上交通が多く使われていました。群馬県には荒川を遡って、利根川に入って群馬県の川の港に着くという交通システムがあったことが分かっています。

遺跡の分布を地図に落としていくと荒川沿いに並びます。ですから千葉の港にヤマトの文物が着き、川船に乗せ換えて荒川を遡って内陸まで搬送する、人もこのルートを使って移動したと思われます。

群馬県の地図(次頁左図)をみますと、利根川を境にして西群馬と東群馬に分かれるのですが、沢山の古墳があります。地図には墳丘長 90m以上の古墳をプロットしていきまして、32 基が知られています。4 世紀から 6 世の 300 年間に 30 基くらいの大きな古墳が造られました。例えば 100m くらいの方後円墳は長野県には一つしかありませんが群馬県には 32 基あります。古墳を造るにはそれなりの経済力や人口が必要で、単純には長野県の 30 倍くらいの経済力や人口を有していたと言えます。現代でも東京近郊に大きな市が沢山あるのと同じと考えていいと思います。

1500 年前の群馬県地域は市長が沢山いるような経済的に隆盛していた場所であったと考えることができます。



なかでも太田市にある「太田天神山古墳」の墳丘長は210mで、東日本最大の前方後円墳。千葉県で一番大きな古墳は富津市の「内裏塚古墳」で144m、茨城県では「舟塚山古墳」で186mです。200mを超えているのは東日本では群馬の古墳だけです。

話の中心は榛名山山麓地域になります、西群馬の主峰榛名山が5世紀末、6世紀に2回大噴火し、発展していた古墳社会を埋めました。そのために当時の古墳時代のいろいろなシステムが分かってきました。

4. 群馬県古墳前期の低湿地開発

◆古墳時代の幕開け

衛星写真（右図下）を見ますと榛名山の山体が1万5千年前に崩れて麓に扇状地ができました。扇状地は山崩れでできた場所ですから水は全部しみ込んでしまって水のない乾燥した大地なのです

扇状地が終わるところから水が湧く湧水地帯が形成されています、その水が流れて行って低湿地になり、山の部分、山崩れでできた扇状地（水がない場所）、湧水地帯、水が流れてジメジメした低湿地に地理の区分ができます。

古墳時代の前の弥生時代（2世紀から3世紀）は湧水地帯に人は住み、水田を造って小規模な農業を営み暮らしていました。使っていた土器は右図上部のものです。2世紀から3世紀の弥生人達は低湿地を開発していません。つまりジメジメしてコントロールできない泥沼に田を造ることができなかったので湧水地帯あたりで田を小規模にやっていた。古墳前期（3世紀）になると右図下部の土器を持った人達が大量にやってきました。この土器はそれまでの土器とは全く違い、東海地方の土器です、3世紀になると低湿地が空いているので東海の人達がいっせいに移住してきたことが分かっています。最近の研究ではこの時代は環境変動が大きく雨がすごく降ったらしく、濃尾平野にある木曽三川が氾濫して東海地方の農業経営に破綻をきたしてしまっただけで東海地方人々の一部が関東に大規模に移住したことが分かっています。その東海地方の土器を携えた人たちが住み分けるようにしてこの低湿地に住んでいることになります。東海の人々はずっと濃尾平野を耕してきたので湿地を耕す技術をもっているのです。群馬の人達がずっと開発できなかった不毛の大地を東海地方の人達が開発していきます。このことが古墳時代の幕開けになるのです。



5. 低湿地の土地改良をどう耕したか

◆東海の人々の湿地帯開発ソフトウェア

「砂町遺跡」は湿地にある遺跡です（上図）。湿地に四角く溝を掘りめぐらしています。

溝は幅 1 m くらい、深さ 50 cm くらいで方眼状に掘っています。滞留している悪い水をこの溝で排出し、やがて水が切れて乾燥していきます。乾燥したら大きな水路を設けます。幅が 7~8m 深さが 2m 程の堀をほる（下図）、この溝によって広域的に水を引き、屈曲部に堰を設けて水を引き出したりしています。最初に排水溝を掘って乾燥させて用水路を掘るという順番で湿地帯をコントロールさせていったことが分かりました。この技術は前から居た弥生人は持っていない技術、東海からの人が持ち込んだ湿地帯開発ソフトウェアです。

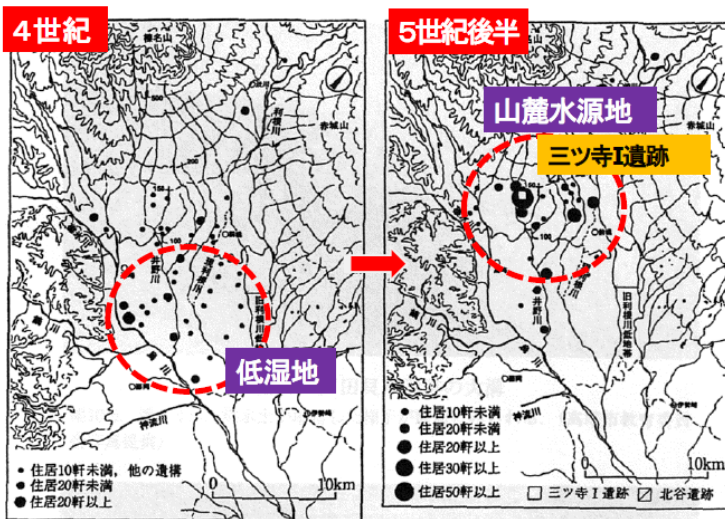
（右図）のような巨大な V 字形の溝が何キロに亘って掘られています。これによって用水を供給すると同時に水を排出することもでき、この広域用水路を掘って水田を開発してきました。こうした水田開発の成功によって経済力が安定し、最初の古墳が造られます。

東海から移住してきた最初のリーダーのお墓は彼らのルーツである前方後方墳を造っています。最初の古墳は「元島名將軍塚古墳」で墳丘長 95m あり、東海地方からやってきたリーダーが農業開発を成功させて造ったお墓ということになります。この段階ではヤマトと連合していないので前方後円墳になっていませんが、この様に低湿地を開発するソフトウェアによって大地を切り開いたことが分かっている群馬県地域の古墳社会はここから始まります。

東海系の人々は千葉県などにもかなり住み着いたことが土器の研究で分かっており、関東の古墳時代の開始は彼らの移住によって突き動かされたのです。



6. 古墳中期の遺跡の移動：低地から山麓へ



古墳前期（3 世紀～4 世紀）は低湿地開発の時代でした。関東地方の使われていなかった低湿地を東海の人々のソフトウェアによって田んぼに変えていった。「葦原を黄金の水田地帯に変えていった」時代であった。（左図左側）は 4 世紀の遺跡の分布をプロットしたものです。

榛名山麓の低湿地に遺跡が沢山分布しており 4 世紀は低湿地の開発時代です。

5 世紀になりますとこの遺跡の在り方に変化が生じてきます。4 世紀の後半になりますとヤマト王権と連合してヤマトの方からいろいろな技術が入ってくるよう

になります。お墓も前方後円墳に転換してきます。

（上図右側）5 世紀の後半になりますと遺跡の位置が移動します。移動先は山麓水源地、扇状地が終わって水が沢山湧く場所です。そこにできたのが「三ツ寺 I 遺跡」で豪族の館の跡です。

つまり 5 世紀になると 4 世紀に開発していなかった山麓水源地に開発をシフトしました。低湿地は完成（田んぼになった）したので、山麓水源地の方に遺跡が移っていくことがわかります。この地域に大きな館を造ったり、古墳を造ったりして開発を進めていったことが分かっています。社会的資本をこの山麓に集めたことが遺跡の分布から分かるわけです。

7. 古墳中期の地域経営拠点

遺跡が進出していった場所です。（次頁右図） 榛名山麓に扇状地が広がっていて扇状地には水がありません。破線のところで扇状地は終わっていて水源地が点在し、今でも井出、冷水と言った地名が

点在しています。

ここは沢山水が湧き、水の湧くところに「三ツ寺Ⅰ遺跡」を築きます。その居館を中心にして村を配置し、水田を広げていったことが分かっています。水源地を見守るような場所にお墓を造るのです、このような遺跡の分布が分かってきました。山麓に遺跡が移動した理由は、そこに流れてくる水を系統的管理、つまり水源を管理し系統的な用水ネットワーク（水利権）を確立しようという目的をもってこの場所に進出してきたと考えられます。



8-1. 豪族の居館（三ツ寺Ⅰ遺跡）



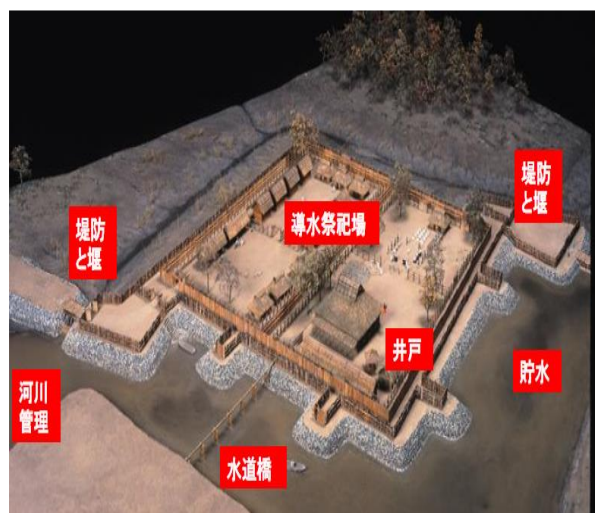
「三ツ寺遺跡」調査時の写真です。上越新幹線建設時の調査で発見され、日本で初めて発見された古墳時代の王様の居館遺跡です。



発掘すると周りに掘りが巡っていて、出っこみ引っ込みがあって、石が貼付けられています。柵が3重にめぐらされていて、写真中の人物と比較して非常に大きな張り出しがあります。



8-2. 三ツ寺Ⅰ遺跡（復元模型）



（左図）は発掘成果を基に私が監修した復元模型です。基本構造は一辺 90m の大きな四角い構造物。もともと川が流れていました（左図下部）、川を「堤防と堰」で堰き止め、下流の方にも「堤防と堰」（左図右上部）を作っています。この部分が豪なのですが大地をL字型に幅 30m・深さ 3m を人工的に開削したものです。上流・下流の堰で水をためる貯水池によって河川管理していたことが分かります。

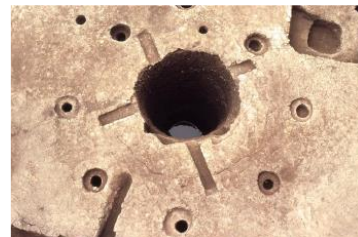
5 世紀までは日本に貯水池を造る技術はありませんので、この頃に朝鮮半島から技術者を呼んで、大陸系の技術を投入して初めて貯水池を造れるようになります。これまで垂れ流しであった水を貯水管理ができるようになりました。（日本書紀に記述あり）

（上図中央下部）水道橋（長さ 40m）が掛かっていて、日本での最古の水道橋です。水道橋で外から神聖な水を館に引き込んで石敷きを造って水の儀礼をやっていたことが分かりました。外から水をひいて神聖な水で王が水祭祀を行う導水祭祀場がなかに設けられていました。生活のための井戸ではなく、王のための神聖な井戸が掘られています。

（上図の中央の建物）これらが所謂 祭殿で、この地域の王が祭祀を行う場所です。この居館は石が貼られ白い荘厳な外観で、周りに三重の柵を廻らして中が見えないように目隠し、水に関する様々な儀礼をおこなった場所ということになります。（右図）祭殿遺跡



こういう館を構え、水源を管理し、朝鮮半島の治水技術を使い用水管理をしている、そのためのシンボリックな施設を山麓に造ったことが分かりました。張出のところで王が儀礼を行ってその水を清浄化・神聖化し、水を自分の支配地に流すという仕掛けを造ったのだろうと思います。また王の祭殿の隣に井戸を掘るのは弥生時代以来続けている伝統的な王の水の祭祀です。伝統的な井戸による湧水祭祀と神聖な水を導水してきて石敷きの所で祀りを行う新しい導水祭祀といった、二つの祭祀をこの場所で行っていたことが分かりました。

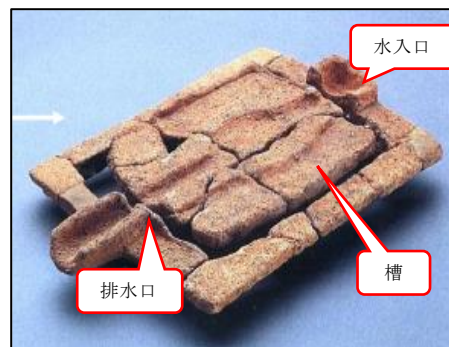


王の水祭祀は群馬だけで行っているわけではありません、三重県「宝塚古墳」という伊勢の国 最大の前方後円墳(5世紀前半)を発掘したところ、(右図)のような埴輪が出てきました。

塀で囲われた家形埴輪があり、分解しますと三ツ寺遺跡に似た構造の王の導水祭祀の場所を模った埴輪であることがわかりました。

古墳時代の豪族は基本的には農業王ですから、水をコントロールして稲を育てるという使命があり、そのための水祭祀を日本各地の豪族が行っていた証明になります

また「奈良県南郷大東遺跡」(5世紀前半 奈良の大豪族葛城氏が経営した遺跡)でも導水祭祀遺構が発掘されていましてヤマトの大豪族も水の祭祀を行っていたことが分かりました。



9. 大水路と小区画水田

「三ツ寺Ⅰ遺跡」のそばを発掘すると水路が出てきました。深さ4m 幅11mです、これが全部榛名山の火山灰に埋もれていたのです。直線水路はずっと大地を貫通していることが分かりました。

古墳も造る、館も造る、水路も掘るというのが1500年前の豪族の仕事です。

「三ツ寺Ⅰ遺跡」の濠に貯められた水は王の祭祀によって神聖な水となってこの水路を通して流れ、流れ下った水がたどり着くのは水田地帯です。古墳時代の水田というのは一辺が2mくらいで碁盤の目のように連なっているのです(下図)。



なぜ田んぼを一枚ずつ小さくしたかは、「平野の棚田」と考えると分かります。田んぼ一枚を大きくすると土をかなり動かさなくてはなりませんが、土を切り盛りせずに区画を小さくする(小区画水田)と、少ない労力で延々と水田を広げられます。こういう小区画水田を連鎖させていって榛名山麓一帯を大規模な田んぼに変えたのです。山麓の水源を押さえ、王の館でストックし、大水路を通して自分の支配下の田んぼをくまなく潤す。すなわち新技術で管理した用水を支配地に分配する、今でいうと農地改良を行ったということが明らかです。

10. 保渡田古墳群

◆地域経営者たちの墓

地域経営を推し進めた王が「三ツ寺遺跡」に居たわけですが、彼らの死後埋葬されたのが、保渡田古墳群です。(次頁左図) 古墳群は、館から1km程北に離れた水源地帯を守るような場所に営まれています。5世紀後半の「井出二子山古墳」は100mの大きさの前方後円墳、二重の濠を廻らせた格式高い古墳です。



次に「八幡塚古墳」、最後に「薬師塚」の順番に三つの前方後円墳古墳が相次いで造られました。5 世紀後半としては東日本有数の古墳です。

「井出二子山古墳」は盗掘されていたのですが、石棺が残っており、朝鮮半島の伽耶の国のお王様のお墓から出たものと同じ馬具が出土しました。また新羅の国で造られた太刀、雲母製の飾り、純金製の装飾具など日本

でほとんど出ていないものがこの古墳から見つかりました（右図）。つまりヤマト王権や朝鮮半島に強いコネクションを持っていた豪族のお墓と考えられます。

この二子山古墳の被葬者は、この地域に進出してきた人で、三ツ寺遺跡を造って、水利を完成させました。また渡来人を招致してその技術を榛名山麓に投入した開明的な人だったと考えます。



1 1. 産業王としての首長

◆井出二子山古墳の遺物から産業王・農業王の姿が見える



二子山古墳からは新しい技術（窯で焼く）で作られた須恵器が出ました。この頃の須恵器は大阪の窯で焼いた優品が各地に供給されていました。しかし、二子山古墳から出土した土器を見ると歪んだものがあります（左図）。偉大な王様のお墓にこのような失敗品をふつうはお供えしないと考えます。私の見方は、群馬県に窯業を興そうと思って大阪から技師を呼んできて群馬で初めて窯を造った、その時の失敗品だと考えます。上毛野の初めての国産品だったので、わざわざ失敗品でもお供えしたのでしょう。手工業を振興した豪族の姿がこの発掘

から分かってきました。この「井出二子山古墳」の被葬者は渡来人を呼んできて水利経営を推し進め、治水を進め、窯業・石材加工、埴輪を焼くなどを推し進めた、産業王・農業王だったのです。

1 2. 八幡塚古墳

（下図）は2代目の王が埋葬された八幡塚古墳です。この古墳の特徴は濠の間の土手に人物埴輪をたくさん並べており、調査して復元整備した様子です。写真のように公園になっています。



先程説明した通り古墳は幾何学的な姿です。段々に造られて、石貼りの姿で埴輪が並んでいます。「榛名山の青いシルエットを背景にその前に白い古墳が目立ち、赤い埴輪が並んでいる」という強力なルックスなのです。そ

こに人物・動物埴輪が並んでいます。

人物・動物埴輪は土に埋もれていたのではなく展示されていたのです。当時の人は埴輪が並んでいるのが見えたのです。この埴輪は54体あり、王様が館で儀式を行っている場面が再現されています。また王様が狩りを行っている場面、王様が馬などを所有しているという財産を表わした場面なども表わされています。八幡塚に埋葬された王が生前、様々な儀礼・祭祀・神祀りを行ってこの土地を正當に経営していたことを示していると考えられます。当時の人々はこれらの埴輪を見て王の生前の祀りごとを偲んだと思われます。

◆八幡塚古墳の埴輪群像の中心場面



なかでも埴輪群の中心になっているのが(左図)の埴輪たちです。水をささげる巫女が椅子に座っています。それに対面して王が水を受けようとしています。

隣に重臣がいて、同じく重臣が琴を弾いていて、水を入れた壺があるという水祭祀の情景です。壺から水を汲み上げた水を巫女が王に差し出そうとしている、重臣たちがそこに控えて祭祀を行っている水祭祀の場面です。「三ツ寺遺跡」では館

の中が一番中心的な場所に水祭祀の場所がありました。まさにその場面です。豪族が生前に館で水祭祀を行った。それによって毎年正しく神を祀り、水が供給され、稲が実り、人々の生活が安定しました。その生前の王が館で正しく神祀りを行った様子を死後の墓に造形して留めたという関係性がよく分かります。

1 3. 招致された渡来人

様々な産業王としての活動した「保渡田古墳群」の王様たちの技術基盤となったのは渡来人です。高崎市では5世紀の渡来人の遺跡がたくさん見つかっています。

(右図)は「剣崎長瀬西遺跡」です。東日本で最も渡来系の遺物・遺構が出土した遺跡です。まず円墳が出てきました、これは地元の倭人の墓でトップクラスは前方後円墳で、その次が円墳ですので王の家来たちのお墓と考えられます。



王の家来の円墳のすぐそばに別のグループがありまして、四角い古墳です。四角くて石を積んでいる積石塚が出てきました。倭系の墓は円形、渡来系は方形、しかも石だけで低く(高さ1mくらい)積み重ねて造っている積石塚で、ルーツは朝鮮半島にあります。遺跡では積石塚のグループが固まっていて、大きい方墳と小さい方墳があり、渡来人は集団で居て、その中に階層があったと推定できました。このことから多くの渡来人が「保渡田古墳群」の豪族の配下にいたことが分かりました。



(左図左側) この遺跡から出土した渡来系の文物です。金の耳飾りは長さ10 cmほどでチェーンが繋がって垂れ飾りがついています、これは朝鮮半島の伽耶で作られたもので、積石塚から出てきました。

(左図右側) また韓式系軟質土器が出てきました。茶色の平凡な土器に見えますが、形が日本の物と違うのと、叩きの技法で作られています。この技法も倭系のものではなく朝鮮半島のものです。しかも軟質土器と言いまして、日常製品ですから、土器作りをやっていた朝鮮半島の人が群馬で土器作りをしたことを示しています。こういう土器は第1世代ですぐに消えてしまうので、渡来1世代・2世代の人がいたという証明になります。

さらに馬の埋葬土壌(お墓)が出てきて馬に装着されたままの鉄製の馬具(右図)が出てきました、これも朝鮮半島製品です。この様に「剣崎長瀬西遺跡」からは積石塚、金工品、日常生活用土器、馬関係遺物などが出土したことは、この地にやってきたばかりの渡来人集団がこの地の豪族に帰属していて、集団の中に金工品を持っているような上位層の人や、馬生産に携わる技術を持っている人もいたと推測されました。



1 4. 保渡田古墳群首長配下の渡来人の長の墓(下芝谷ツ古墳)



先程の「剣崎長瀬西遺跡」の積石塚は小さかったのですが、「下芝谷ツ古墳」(左図)は、1辺 20m の方墳で、土石流で埋もれていて高さも残っていて、もう一段積石塚を上に乗せていることがわかりました。このようにひときわ大きい積石塚は

渡来集団を纏めていた長（リーダー）の墓で、王の客分のように遇されていたと推定させます。

この古墳からは金属製の靴(右図)出てきました。銅板で靴を作り金メッキし、唐草模様をあしらっていてガラス玉が多数はめてあり、歩揺が無数についています。これも朝鮮半島系文物です。こういう渡来系の長もこの地域にいたことが分かりました。纏めると、群馬県の豪族の配下には渡来人が大勢いた、その人たちが技術者としていろいろな技術を提供していることが推定されました。

15. 首長の実像

◆榛名山の火砕流に倒れた首長



今から 10 年くらい前に渋川市で国道の発掘をしたら、鎧を着た人物が出てきました。

(左図)「金井東裏遺跡」です。5 世紀末ごろの榛名山の最初の火砕流をはがしましたら溝が出てきて、鉄の鎧を着たまま倒れている男性が出てきました(右図)。手を前についてガックリと倒れ伏すような姿です。

人物を復元すると、最高級の鎧を着ています。鎧は小札甲(小さな鉄板を 1800 枚綴ったもの)でヤマト王権の工房で作られ群馬にもたらされた最高級品です。この人物はこの地域の豪族に間違いなく、古墳時代 当時の王の一人が火山噴火で倒れたという奇跡的なもの



として発掘されました。また この人物の周りにいろいろな「まじない」の道具が配置されていました。これは噴火する榛名山の神に対決して死んだ人と考えています。

普通は神祀りの時には白い清浄な衣を着るのですが、この人は鎧を着ています。つまり荒ぶる神には武装して共同体のために対峙して退けることが王の使命で、それを実践している時に火砕流に巻き込まれて死んだと考えられます。

16. 馬生産の展開



「渋川市白井遺跡群」(左図)で火山灰を剥がしていくと黒土の上に馬の蹄の跡が出てきました。おそらく噴火の数日前に馬が沢山集められていて、馬の蹄の跡が窪んでいて火山灰が埋めていた。普通、馬の蹄は一冬過ぎると消えていきますので、噴火直前まで沢山いたことになります。

これは馬追いをした場所だと推定しています。馬生産は朝鮮半島から渡来人を呼んで開始されました。

当時の馬生産は自由放牧で、普段は山に放って勝手に食べさせ、生殖させ初夏になると馬追いして幼齢馬をとる。(相馬馬追いは自由放牧の名残)子馬は素直なので調教してヤマトに出荷するシステムができていたことがこの遺跡で分かりました。

17. 馬生産の意味

- ① 馬の利用は動力革命（エネルギー革命）です。人力でやっていたことを馬がやってくれるので、近代自動車産業の新興に匹敵します。例：権威（俊馬＝リムジンカー）・軍事（軍馬＝戦車）・運搬（荷役馬＝トラック）・農耕（農耕馬＝トラクター）・情報伝達（駄馬＝公用車）
- ② 馬生産は古代の総合産業です。馬だけでなく、馬の飼育・調教システム、貴重品である馬の生産出荷管理。馬の飼育には塩が必要なので内陸まで塩を調達するシステム、それから馬具生産（鉄・革・木工）といった総合産業として発展したことが分かります。
- ③ ヤマトでは土地に限られていて馬生産は大規模にできないため、王権と連合する豪族に委託して生産させていました。群馬の豪族も委託を請けて生産を進めていたと考えられます。奈良県で出てきた馬の遺体をストロンチウム分析したところ東日本の値がでました。この結果から古墳時代・奈良時代に東国で生産された馬がヤマトに送られたことは確実であります。群馬県の”群馬”という由来は古墳時代の馬生産の成功にルーツを持っています。

18. 鉄器生産の進展（鉄器生産は最先端産業）

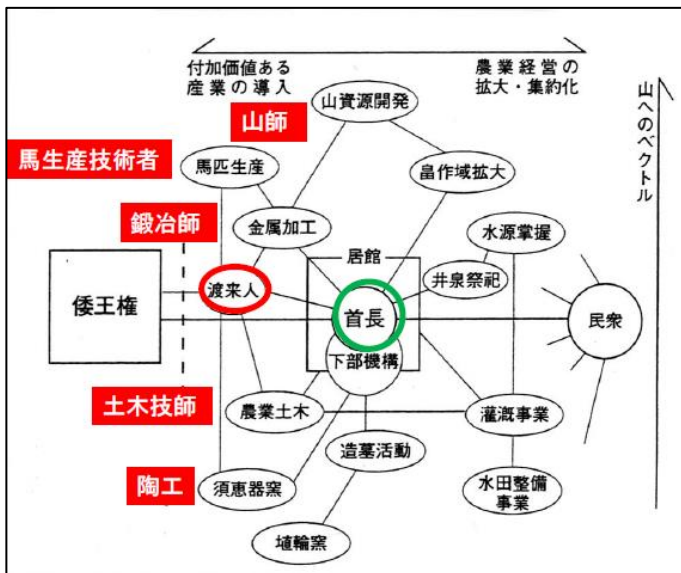
「金井東裏遺跡」からは鉄器鍛冶工房が出てきました。鉄器生産もこの頃に朝鮮半島技術を得て飛躍的に進みました。

19. 渡来人の編成による地域経営の改革

古墳時代豪族は渡来人を編成して新たな地域経営を推進しました。

- ① 水利技術の革新による用水の管理で水田エリアを拡大し、生産力を向上させた。
- ② 鉄器製作技術の革新 ⇒ 鉄器普及による地域開発。
- ③ 馬生産による動力革命（人力から畜力へ）⇒ 権威・情報伝達・運輸・農耕・軍事

この地域の首長は、朝鮮半島での活動を契機に、地域振興を目的として渡来人技術集団を東国の地に投入してきたことが明らかです。



（左図）は当時の豪族の地域経営モデル図です。首長を中心として渡来人を組み込み、さまざまな開発を行っていた。

具体的には馬生産（馬生産技術者）・金属加工（鍛冶師）・農業土木（土木技師）・窯業（陶工）といった開発です。この時期には畑作も盛んに開発していました。渡来系の新しい作物を5世紀に沢山導入してきたと思います。

もう一つはまだはっきり分らないのですが古墳時代から鉱山開発に着手していたようです。まだ証明されていないのですが日本で鉄資源が利用されるのは古墳時代の終わり6世紀ですので、一生懸命鉄山を探している可能性が考えられます。

20. 日本書紀に記述にある上毛野氏の対外活動

◆古学的事実と、古代文献の外交伝承記事に整合がみられる。

これまで考古学の視点で見てきましたが、日本書紀の記述を紹介します。

日本書紀の中に上毛野氏（群馬の豪族）活動が書かれているのですが、古いところ（神功紀・応神紀・仁徳紀）には上毛野氏の祖先たちが新羅に将軍として出兵したとか、将軍として新羅を責め4つの村の民を連れ帰ったなどの記述があります。そして比較的に新しいところでは663年に白村江海戦

(唐と新羅の連合軍 VS 百済と倭の連合軍)で倭は敗戦していますが、このときに群馬の豪族は將軍のひとりとして出兵しています。

考古学から見る渡来人の存在と同時に、日本書紀に東国豪族が倭の將軍として半島に行って戦っている記述とを考察すると東国の豪族が海を超えて古墳時代に往来していることは明らかです。

2 1. まとめ

保渡田古墳群被葬者を中心とする地域経営の実像

1. 治水王・農業王として

- ・湧水、河川の管理による広域農業水利権
- ・灌漑水路・貯水池・堰堤・掛樋など農業土木技術
- ・小区画水田による水稻農業の集約化
- ・空閑地は大畑作地帯

2. 産業王として

- ・古代の総合プロジェクト「馬生産」を開始（群馬のルーツ）
- ・須恵器生産・埴輪生産・石材加工など手工業

3. 宗教王として

- ・豪族居館等の祭場において、地域の神まつりを統括

4. 対外的活動

- ・ヤマト政権の有力な一員、東アジアの外交・軍事に参画
- ・渡来人を招聘・傘下に組織し、地域経営に応用

このように古墳時代の特に火山灰に埋もれた遺跡を研究していくことによって、古墳時代の豪族の活動が立体的に明らかになりました。古墳は結果として造ったのであってその背景に地域の農業経営や手工業生産、海を越えたような経済活動があったということを今日は紹介しました。

【質疑応答】

Q 1 : 千葉県芝山古墳の展示資料館にユダヤ人に似た埴輪が沢山あります。資料館にはユダヤ人と言も書いていなかったのですが、何か都合の悪いことがあるのでしょうか？

A 1 : ユダヤ人の装束に似ているのでユダヤ人埴輪といわれる人気の埴輪です

(右図)。山高帽をかぶって髭がもじゃもじゃ生えている姿が芝山の埴輪です。結論から言うとユダヤ人ではなく、千葉県人だと思います。埴輪はその地域の生前の王の姿を模っており村人たちが生前の王を偲ぶためのものなので、千葉県の古代の王の姿だと思います。確かに奇抜な衣装ですが、あれは当時の最先端衣装（大陸系）ファッションだと思います。それを所持し、着て儀式を行っている姿だと思います。当時の王は最先端のファッションも身にまとっていることの表れなので、ユダヤ人ではないですが異国風なファッションをしている千葉県の王様ということです。髭を生やしているのは当時の千葉九十九里の豪族は髭を生やすことがステイタスだったと思います。当時は長老の王の証ということで、髭を生やした姿がみんなの憧れだったので、そのように作ったのだと思います。



Q 2 : 太陽信仰というのがあり、太陽が昇るところに行ってみたくて東へ移動する。中国やヨーロッパなどの大陸から日本に渡って東を突き詰めたら九十九里に来た。そこにイスラエルからユダヤ人が一人か二人は来たのではないかと思います。先生のお考えは？

A 2 : とても夢があります、古代史には夢が膨らむことが大事です。古墳時代は第1次国際化の世紀です、グローバル化の時代なので古墳時代には外国人が沢山いました、一番居たのは朝鮮半島の人達です、次が中国の人です。当時鉄剣に文字を刻んでいるのですが、中国人が刻んだような名前があるので中国系の官人がヤマト宮廷にいて漢字を教えていたことは十分に考えられま

す。飛鳥時代になってお寺造り始まり、そのために技術者がやってくるのですが、その中に中国よりもっと中央アジア寄りの人の名前もあります。

Q 3 : 前方後円というデザインをとった理由・背景を教えてください。そして古墳構造を日本全国に伝える方法として、設計図とか大きさのわかるものを支配の道具として使ったのでしょうか？交通とか伝播ツールがないように思うのですが、構造設計の展開の仕組みを教えてください。設計図が残っていたのでしょうか？

A 3 : 古墳時代の前の弥生時代は中国の文献、日本の遺跡から見ても戦争の時代でした。弥生後期 1 世紀から 2 世紀は特に西日本は戦争の時代で、各国毎でお墓が違い、大きく分けて四角いお墓と丸いお墓がありました。そのお墓に祭壇をくっつけ、祭祀を行います。丸いお墓に方形の祭壇を付け、その祭壇で祀りを賑々しく行う。次第に祭壇はどんどん発達していきます。そうして円形に方形が付いた前方後円墳の原型ができたのです。つまり前方後円墳の成り立ちは祭壇が発達したからだと考えられています。

しかしなかなか戦が終わらないので、「魏志倭人伝」には「卑弥呼を共立して戦を終わらせた」とあります。また「魏志倭人伝」によると卑弥呼が死ぬと卑弥呼の墓をものすごく大きく造ったと書いてあります。巨大な墓を造ることで連合体の離散を防いだのでしょうか。当時の倭の中心であったヤマトのお墓が前方後円型墳丘墓（弥生時代の前方後円型のお墓）で全長が 100m 位ありました。連合を纏めるにあたって前方後円型墳丘墓を飛躍的に大きくして最初の巨大前方後円墳（墳長 280m）の「箸墓古墳」ができました。これが古墳時代のスタートです。

奈良と岡山に初期の前方後円型があり、ヤマトから吉備を中心として初期ヤマト連合が組まれたのでその前方後円墳をシンボルにしました。前方後円墳に墓を統一することで和平の証としたのです。前方後円墳があるところは我々の仲間であって、鉄が行き交う、貿易もできる、戦もない、同じ宗教連合体だという安全のメンバーズカードのようなものです。設計図はたぶんあったと思いますが、当時は紙がありませんので、板に書いたというよりは頭に記憶したと思われます。頭に図式が入っているような技術者が沢山いて、そういう人々がヤマトから地方に派遣されて、現地で古墳を造る。そのような方法で設計が広まったと思います。

Q 4 : 前方後円墳が朝鮮南部にあります、遺跡の分布の考え方によれば、その地域はヤマト王権の連合体と考えられるのでしょうか？

A 4 : 朝鮮半島にも前方後円墳はあります。日本で前方後円墳を造ったのは 3 世紀中頃から 6 世紀終わりまでの 350 年間です。しかし、朝鮮半島の前方後円墳は 15 基くらい見つкаっていると思いますが全部 5 世紀後半から 6 世紀前半までの 100 年間しかありませんので、古い古墳はありません。どこにあるかという半島南西部の栄山江流域に集中しています。栄山江流域はグレーゾーンです。やがて百済がその地を併合していきます。それまでは倭と弥生時代以来、交流している場所です。そういう時に一時的に表れる前方後円墳の群れです。

前方後円墳の形はしていて、埴輪のようなものが並んでいますが埴輪ではありません、つまり模倣しているものです。この流域には同じ時期に方墳もあり、方墳と前方後円墳が一緒に造られ、どちらかという方墳の方が栄山江流域の上位のお王様、前方後円墳は少し違うタイプの有力者のお墓のようです。この理由のひとつは、一時的に倭系の人が進出していた。もう一つは、倭との関係をその時だけ強調する必要があったので、地元の豪族の 2 番手くらいの方が前方後円墳を造った可能性です。ヤマトの前方後円墳システムに取り込まれないで倭との関係を強調しなければならないような社会情勢が半島にあり、その中でアピールのために倭系の前方後円墳を造ったという風に考えるのが良いと思います。

Q 5 : 古墳時代に朝鮮に何度も出兵していますが、ヤマト王権は連合体で確固たる勢力を持っていないと思うのですが、何を目的に出兵したのでしょうか？

A 5 : 王権自身が連合政権ですから弱いですが、6 世紀の前半になっても「磐井の乱」が起こって、北部九州の豪族がヤマト王権に立ちあがったりしました。王権が専制化していくのは欽明朝（6 世紀中頃）以降です、それまでは非常に揺れ動いており朝鮮半島の情勢をバランスとりながら、

進出したりしているわけです。日本に軍事的野心があって派兵しているわけではなく、朝鮮半島の情勢を支援することによって、鉄資源を優先的に得るなど経済的な背景も大きかったと思います。このような情勢を踏まえながら多元的な理由で半島との関係をバランス良く維持したのが倭王権の在り方だったと思います。

若狭 徹 （わかさとおる）先生のプロフィール

- 生年：1962 年生まれ。群馬県出身
- 学歴：明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
- 学位：博士（史学）明治大学
- 職歴：群馬県高崎市教育委員会文化財保護課長をへて、2017 年に明治大学に着任。
現在：明治大学文学部史学地理学科考古学専攻専任教授
- 略歴：高崎市役所時代は、学芸員として埋蔵文化財調査、国史跡保渡田古墳群の保存整備、かみつけの里博物館の設立に携わる。文化財保護課長（課員 60 人）に就任後は、国特別史跡上野三碑の「ユネスコ世界の記憶」登録、国史跡北谷遺跡の公有化、国史跡日高遺跡・国史跡箕輪城の整備、新町紡績所の国重要文化財・史跡指定推進、多胡郡正倉跡・上野国分尼寺の保存推進、国重要文化財榛名神社の大規模修理、市内歴史系博物館 6 館の運営などを総括した。2017 年に母校に着任し、古墳時代を中心に研究するとともに、フィールドを重視した実践的な学生教育を行っている。
- 専門：日本の古墳時代。古墳・首長居館・集落・生産遺跡・渡来文物などを統合して研究し、立体的な古墳時代社会像を描き出したいと考えている。また人物埴輪についても調べている。文化財の保存活用にも関心があり、各地の史跡整備の委員としてお手伝いしている。
- 受賞：古代歴史文化賞（島根県・奈良県・宮崎県・和歌山県・三重県）拙著『東国から読み解く古墳時代』で受賞
浜田青陵賞（岸和田市・朝日新聞社）、藤森栄一賞（長野県考古学会）
- 単著：『埴輪は語る』（ちくま新書）筑摩書房〔2021 年〕
『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館〔2021 年〕
『前方後円墳と東国社会』（古代の東国 1）吉川弘文館〔2017 年〕
『東国から読み解く古墳時代』（歴史文化ライブラリー 394）吉川弘文館〔2015 年〕
『ビジュアル版 古墳時代ガイドブック』新泉社〔2013 年〕
『高崎千年物語』高崎市〔2011 年〕
『もっと知りたいはにわの世界』東京美術〔2009 年〕
『古墳時代の水利社会研究』学生社〔2007 年〕
『古墳時代の地域社会復元—三ツ寺 I 遺跡』新泉社〔2004 年〕
- 共著：『古墳時代毛野の実像』雄山閣〔2011 年〕
『はじめて学ぶ考古学』有斐閣〔2011 年〕
- 出演：
放送大学（1 回）、NHK：クローズアップ現代（1 回）
NHK：歴史秘話ヒストリア（3 回）、NHK：日本人のおなまえっ！（2 回）、
TBS：世界ふしぎ発見（2 回）

以上